

サラハパーダ作 ドーハー・コーシャ

(翻訳及びノート) (I)

奈 良 康 明

おおよそ8世紀より12世紀にかけては、中期インド語(Middle Indo-Aryan)文学より新期インド語(New I-A)による文学への移行期である。その中にあって、仏教タントリズムのうちの一支派、サハジャ乗(Sahaja-yāna)に属する“師匠”(Siddha, Siddhācārya)⁽¹⁾たちの手になる一連の caryāgīti 及び dohā 文学は時代的に古層に属し、後代の Hindu および Jaina mysticism 文学の先駆的役割を果している。⁽²⁾ 現存の Caryāgīti-kośa (caryāgīti 集)という作品には少くとも22名以上の Siddha たちの作品を収めており、dohā については、本稿の主題である Sarahapāda をはじめ、Kāñhapāda, Tillopāda 三者の Dohā-kośa が知られ

(1) “行の歌”的意で, caryāpada とも云われる。caryāpada とは二行連句を意味し、便宜的にそれを文学ジャンルの名前に用いている。cp. S. Sen, Indian Linguistics, X, 1948, p. 40

(2) dohā には二つの意味がある。(イ) dohā meter のことで、25 morae をもち、13番目の morae のあとに caesura があり、二行にかかるので dodhaka 又は dohā, すなわち二行連句(couplet)という。(ロ)しかし、16 morae よりなる四行連句(catuṣpadī, caupāī)もひろく dohā の名のもとに総称される。cp. S. Sen, History of Bengali Literature, New Delhi, 1960 (以下 HBL と略記), p. 20

Dohākośa という場合の dohā とは後者の意味で、仏教のみならず、当時一般に流行した文学型式である。例えば Pāhuḍa-dohā はシヴァ派の yogin である Rāmasinha により書かれたものであり、Sāvayadhamma-dohā はジャイナ教徒の手による作品である。cp. HBL, p. 36. 仏教サハジャ乗に属する Dohā-kośa にみられる meter の詳細については、see M. Shahidullah, Les Chants Mystiques de Kānha et de Saraha, Paris, pp. 57 ff

(3) cp. HBL pp. 28 ff; 36 ff; D. Candra Sen, History of Bengali Language and Literature, Calcutta, 1954, pp. 44 ff; S. K. Chatterjee, The Origin and Development of the Bengali Language, Calcutta, 1926 (以下 ODBL), p. 121; S. B. Dasgupta, Obscure Religious Cult, 2nd Revised ed., 1966 (以下 ORC), pp. 6 ff, 50 ff

(4) この二人はそれぞれ Saraha あるいは Kṛṣṇa, Kānupā, Kāniphi, Nātha とも呼ばれる。

ている（以下それぞれ、DKS, DKK, DKT と略記）。この三人のうち、Tilopāda を除く二人の名は Caryāgīti-kośa の作者のうちにもみえ、この両作品は、“同一の学派に属し、両者にみえる同一の名前は、おそらく同一人である”，と一般に推定されている。⁽⁵⁾ 両者にみられる思想内容にも大差はないが、しかし、その言語、表現方法にはかなりの差異があり、同じくサハジャ乘の作品といっても別個の文学型式を代表するものとみていい。Caryāgīti-kośa の言語は Old Bengali を根幹としたものであることに異論はなく、Western Apabhramśa (WAp.) の要素が散見される。しかし dohā はその作者がベンガル地方——少くとも東部インド——出身であることが知られる反面、その言語は種々に想定されている。B. Bhatthācārya は、Kānha はオリッサ地方出身のバラモンで、おそらく Udiyā 語をもって DKK を書いたとする。⁽⁶⁾ S. K. Chatterjee は一種の WAp. とするが、それは作者たちの母国語でない故に、東部ベンガル語の語彙、語法が混入していることを指摘した。⁽⁷⁾ G. V. Tagare はその作品の書かれた地方に従って Eastern Apabhramśa の唯一の作品として DKS, DKK をあげ、WAp. とは別個のものとする。⁽⁸⁾ S. Sen は Avahaṭṭha の中に含ましめるも、実質は Chatterjee の WAp.

(5) cp. ORC pp. 4~5; ODBL, p. 122: S. K. Chatterjee は Hevajra Tantra の註釈書たる Yogaratnamālā の作者 Kānha と DKK の Kānha とを同一人とするも、ORC はこれをうたがい、Snellgrove も Kānha とは平凡な名前で同名異人が多く、この両者を同一人とする理由がないことを示した。cp. D. Snellgrove, The Hevajra Tantra, London, 1959 (以下 HT), pt. I, p. 14, foot note. 尚、Caryāgīti-Kośa には Kānha に帰せられる gīti が 12 あるが、Chatterjee はすべてが同一人の作であることを疑がい (ODBL p. 120)，これをうけて S. Sen は二人の Kānha を想定する (HBL p. 31)。

(6) ODBL pp. 98, 112 ff; ORC p. 5; HBL p. 27; L' Inde classique, II pp. 384, 387 (J. Filliozat). 尚、WAp. については註(8)参照。

(7) An Introduction to Buddhist Esoterism, calcutta, 1932. 邦訳、神代峻通、インド密教学序説、高野山、昭 37, 99 頁。

(8) ODBL pp. 112 ff. ただし WAp. とは必ずしも西インドにのみ用いられていたわけではなく、広く東部インドにおいて用いられた “polite language” である。

(9) Historical Grammar of Apabhramśa, Poona, 1948, p. 20 (以下 Tagare, Ap. Gr.) しかし彼の Eastern Ap., Western Ap. とは ODBL にいうのとは別個のもので、あくまでも地域的関係より名付けられた便宜的なものと思われる。彼のいう “E. Ap.” という一の言語を設定するには、DKS, DKK の二作品だけではあまりに資料が不足であろう。

(10) Apabhramśa と Avahaṭṭha との関係、定義等に関して、see 奈良毅、Apabhr-

説に同じであり、⁽¹¹⁾ S. B. Dasgupta も同様である。

仏教サハジャ乗の教義として、その esoteric な思想と sexoyogic な修行法は周知のことであるが、そのため Caryāgiti は殊更に謎めいた表現を用いる。これは sandhā-bhāṣā と呼ばれ、外的表現の裏に別の真実の意味を含ましめんとする語法である。これは caryāgīti に比して dohā には比較的少ない。

両作品、あるいは Saraha, Kānha の年代については決定的資料の不足もあって定説とすべきものではなく、Kānha を Saraha より古いとする説と、Saraha の方が古いとする説がある。⁽¹⁴⁾ S. K. Chatterjee は Caryāgīti を 950~1200 AD とし、⁽¹⁵⁾ S. B. Dasgupta と Rāhulasāṃkṛtyāyana は、Caryāgīti 及び Dohākośa の両作品をまとめて、それぞれ 10-12 c, 8-12 c とする。⁽¹⁶⁾ Dohākośa を Caryāgīti より古いとする説も有力であるが、いずれも決定的なものではない。ところで Saraha の年代について興味をひく記述が DKS 3 に見出される。これは正統インド教を批判している個所であるが、ekadaṇḍin と triḍaṇḍin とをならべる。もしこれをシャンカラ系統の“一本の杖を持つ遊行者”とラーマーヌジャ（1016-1091）系

amśa and Avahaṭṭha—Proto-New-Indo-Aryan Stage, 1965, 言語研究 47 号。

(11) HBL p. 8

(12) ORC p. 4

(13) “intentional language.” cp. M. M. Vidhuśekhara Śāstri, IHQ, 1928, IV, pp. 287-296; P. C. Bagchi, IHQ VI, 1930, pp. 384 ff; ORC, pp. 413 ff (Appendix E); Ś. Bh. Shastri, Caryāgītikośa of Buddbist Siddhas, Santiniketan, 1956, preface XII~XIII; J. Filliozat, L’ Inde classique, II p. 593; B. Bhtthācārya, 上掲邦訳書 91 頁、尚同書 249 頁、松永有慶氏の註解参照。また仏教梵語における用法については、F. Edgerton, BHS Dict. sandhā, sandhyā-bhāṣya この語は多くの文献に sandhyā とあらわれ、“夕暮の言葉”，即ち，“半ば明白に、半ば秘密”な表現と解されていた。Dasgupta は、sandhyā とは (Edgerton のいうごとく) sandhā の書き誤りではなく、sandhā という原語より、その表現の性格上二次的に派生し、用いられた語という。

(14) M. Shahidullah, op. cit., pp. 28, 31 (Kānha: 700 AD, Saraha: 1000 AD)。Tagare Ap. Gr. pp. 20, 110

(15) B. Bhatthācārya, JBORS, 1928, pp. 341 ff ;—do—, 上掲邦訳書 79 頁以下 (sarahā 633 AD, Kānha 717 AD); S. Sen, HBL p. 35 (両者共に 1101 AD 以前)

(16) ODBL pp. 118 ff. 特に p. 123

(17) ORC p. 8

(18) Dohākośa (本書については後述—29頁) p. 8

(19) D. Snellgrove. HT Intro. p. 14 foot note; S. Sen, Indian Linguistics, X, 1948, p. 39

統に属するシュリー・ヴィシュヌ派の“三本の杖を持つ遊行者”を指すものとすれば (see 註 (36)) Saraha はラーマーナジャより後代の人で、11 c. 以降とせざるを得ない。

仏教サハジャ乘の上述諸作品の出版、研究は H. P. Shāstri に始まる。彼は 1907 年、*Caryāgīti* 及び *Dohākośa* の原典をネパールの Darbar Library に発見、1916 年、それらを出版した。⁽²⁰⁾ ここに含まれるのは *Caryācaryaviniścaya*, DKS, DKK, 及びそれらに対する Sanskrit Commentary, *Dākārṇava* の断片であった。1938 年、P. C. Bagchi は *Caryāgīti* のチベット訳を発見、その助けをかりて edition を刊行した。⁽²¹⁾ 次いで S. Sen は *Vajragīti* という作品、*prahedikā* (謎の詩) のいくつかと共に、*Caryāgīti* を “Old Bengali Texts” の名の下に校刊、英訳を附した。⁽²²⁾ 同時に Index Verborum も作製された。本書は最近、幾分の訂正を加えて単行された。近年、Śānti Bhikṣu Śāstri は Bagchi の意志をうけついで *Caryāgīti-kośa* (以下 CK と略記) なる刊本を Munidatta の Skt. commentary と共に出版した。⁽²³⁾

一方、dohā については、1928 年、M. Shahidullah が DKK, DKS を出版 (supra 註 (2), MS 本と略記)、仏訳を試みた。翌年には P. C. Bagchi が両作品のより古いマニユスクリプトを発見、1935 年にそれを公刊した (PB 本)。⁽²⁴⁾ ここには DKK, DKS, DKT の原文および Skt. commentary, DKS の別の recension

(20) Hājar Bacharēr Purāṇa Bāṅgalā Bhāṣay Bauddha gāna o dohā, Calcutta, 1916

(21) これが *Caryāgīti* の名の下に先述してきた作品で 47 の gīti を含む。尚、このタイトルは学者により種々に修正されている。see ORC, P. 3; 望月仏教大辞典, X, “ドーハ”

(22) 後に N. N. Chaudhury が本断片のほか、二本のマニユスクリプト、チベット訳をもとに校訂出版した。Studies of the Apabhramśa Text of the Dākārṇava, Calcutta Sanskrit Series X, 1935

(23) Materials for a Critical Edition of the Old Bengali Caryāpadas, Jour. of the Dept. of Letters of Calcutta Univ., 1938

(24) Indian Linguistics, X, 1948, pp. 1 ff.

(25) op. cit, IX, 1946~8, pp. 43 ff.

(26) *Caryāgīti-paṭāvalī*, Sāhitasebhā, Burdhamān, 1956 (in Bengali)

(27) *Caryāgītikośa*, santiniketan, 1956. Bagchi と共に著の形をとっている。

(28) Jour. of the Dept. of Letters of Calcutta Univ., XXVIII, 1935. これは後に単行された。Dohākośa, Apabhramśa Texts of the Sahajayāna School, pt. 1 Texts and Commentaries, Calcutta Sanskrit Series, 1938

に属すると思われる断片が含まれ、さらに他文献 (*Sādhanamālā*, *Hevajra Tantra* 等) に引用されるサラハの *dohā* も *Sarahapādīya Dohasamgraha* (以下 SDS) としていくつか集められている。この MS 本および PB 本は偈頌の数、マニユスクリプト自体の僅かな差異はあっても、同一の recension に属することは明らかであり、現存のチベット訳も同様である。この両本にもとづき、チベット訳にも大いに依存しつつ Snellgrove は 1954 年、DSK の英訳を発表した。⁽²⁹⁾ 最近 *Rāhula Sāmkṛtyāyana* はより多くの偈頌を含む DSK のマニユスクリプトを 1934 年にチベットの *Sa-skya* 僧院にて発見、1957 年に (Siddha *Sarahapāda-kṛta*) *Dohā-kośa* (Bihār Rāṣṭra Bhāṣā Pariṣad, Patna) を公刊した (以下 RS 本)。8-12c にかけて、*dohā-kośa* は広く流行した文学形式であり、仏教サハジヤ乘の作品についても、現在発見され、公刊されたものにとどまらぬことがいわれていたが、⁽³⁰⁾ RS 本は PB 本、MS 本とは別の recension に属するものであることは明らかである。この RS 本はさらに *Avahaṭṭha* 原文は未発見だが、*Saraha* の名を冠する幾多の作品のチベット訳をあわせ発表している。

本稿はこの RS 本にもとづく DKS の翻訳である。DKS は上述の如く、三の翻訳が従来知られていた (Sen, Shahidullah, Snellgrove)。しかし本作品の特異な内容と性格、特殊な譬喻、術語等のために、直訳は殆ど意味をなさず、従来の諸訳は万全とはいがたい。本稿は、後述するごとく幾多の不明確な点を残しながらも、能うる限り精細な interpretation を試みんとするものである。

RS 本の依拠するマニユスクリプトは、“おそらく最古” のもので、年代は明記されてないが、⁽³¹⁾ 10c あるいは 11c のクティラ文字によりかかれている。偈頌の数は、PB 本、MS 本が 112 であるに対し、RS 本は、筆者の計算によるに 170

(29) E. Conze, *Buddhist Texts through the Ages*, Oxford, 1954. pp. 224-239. (以下 Snellgrove, Tr.)

(30) ORC p. 5. 尚、DKT についても現在は 1 recension のみが知られているが、新しい偈頌が発見される可能性があり、少くとも 2 以上の recension の存在が予想されている。cp. P. C. Bagchi, *Jour of the Dept. of Letters, Calcutta Univ.*, XXIX, 1939, p. 147. 更に *Subhāṣitasamgraha* (以下 SS) (ed. by C. Bendall, London, Paris, Leipsick, 1905) に引用される DKS, DKK, DKT の偈頌にはまだ他に知られぬものが残っている。そのうち 8 頌は PB, MS 本に見出され、さらに別の 1 頌はこの RS 本に見出される。また MS 本に紹介されているチベット訳には原文未発見のものがかなりの数にのぼる。

(31) RS 本, BBhūmikā, pp. 66-68

である。本 edition には一行おきに通し番号が機械的に附されて 165 に至るが、これは便宜上のもので、偈頌の数を示したものではないと思われる。上述した如く *dohā* には couplet, quatrain が含まれ、各偈頌の行数は一定ではないからである。RS 本 170 の偈頌のうち、PB 本、MS 本に見出されるものは 72、従ってのこりの 98 が新らしいものであり、偈頌の配列も大いに異なっている。（後記の対照表参照）

RS 本の構成は可成り乱雑である。*dohā* を集録した作品は殆どが anthology の性格をもち、偈頌は組織的に集められて一の体系をなすものではない。しかしそれにしても、DKK, DKT, DKS (PB, MS 本) は一応の統一を示しているに比し、RS 本は混乱の度がはげしく、類似の内容の偈頌が处处に散在していて、殆ど統一はない。甚だしい例としては、No. 26 と No. 93 とは全く同一の偈頌であり、伝承上の混乱を予想せしめる。また Bagchi が DKT の断片として紹介するものと同じ偈頌が RS に見出され（下記の対照表参照）、果して全部が Saraha なる詩人の作であるか否かは大いに疑問である。もっとも、旧 editions 中にみられるものにも DKT と同一または類似の偈頌があり、DKK に比して DKT と DKS との比較的近い関係が推測され得る。そしてさらに、RS 本 No. 51 (PB 27; MS 29) は Hevajra Tantra に紹介される *Apabhrāmśa* 偈頌の一 (II. 5. 68) と同一であり、また他の Tantric 文献に見られるのと同じ偈頌もいくつかある。先述した如く、Saraha の年代を 11c 以降とし得るならば、Hevajra Tantra (8c, see HT, pp. 10), Sādhanamālā (8c, see Bhatthācārya (editor)'s Intro, pp 10) にある頌を Saraha は自由に引用しつつ自らの作品にくり入れたものと思われる。しかしこの他にも Saraha 作と伝えられる偈頌にして、他の Tantric 文献に見出される例はほかにも多く予想されるのであり、この点についての詳細な対照は今後の研究課題としてのこされている。

本 edition はただ一本のマニュスクリプトによって校訂されたものである。⁽³²⁾勿論、旧 editions は参照されており、更にチベット訳も併せ紹介されているが、これは MS 本に発表されているものと同じであり、従って新しく発見された 98 の偈頌には相応するものは見出されない。また、この部分に対しては註釈書も存

(32) このマニュスクリプトは Bihar Rāṣṭra Research Institute に保管されているといわれるが、1955 年に Dr. S. Sen が巡回したところ見当らずのことであり、さらに 1959 年に筆者が探し求めた時にも入手不能であった。

在しない。variant reading も記載されてなく、率直にいって、校訂者の読み方に疑問のあるものが可成りあるのであるが、それらを比較検討すべき材料がないのはきわめて遺憾である。さらにサハジャ乗の作品として当然なことながら、サハジャ特有の術語、譬喻、成句が多くあらわれる。術語は他の文献あるいは旧 editions などより大凡明らかにし得るも、特殊な譬喻や表現が突然に現れる場合には、現在、解釈するに殆ど不可能と思われるものもいくつかある。校訂者はそうした困難さをすくうために Hindī chāyā を附しているが、この Hindī は現代 Hindī ではなく、さりとて中期 Hindī でもない。きわめて古い形をとどめる、いわば、正体不明の Hindī と思われ、時には原文よりも chāyā の方が難解である点も見受けられる。⁽³³⁾

しかしながら、新しく発見された偈頌には思想的に重要なものが多く含まれ、また、dohākōśa の伝承や、サハジャ乗の他の文献との関係の面などにおいて、注目すべきものであることは論を俟たない。その故に、底本の幾分の不完全さ、解読の困難さも省りみず、あえて訳出を試みたわけであるが、それだけに本訳は一種の trial であり、今後、新しい資料が発見されて解明していくことを望むと同時に、大方の御教示を頂ければ幸である。

訳出にあたっては、あくまでも RS 本に忠実なる訳につとめ、校訂者の読み方に対する疑問、解読を困難ならしめる文法形や表現等はすべて脚註に記した。また、PB, MS 本にもみられる偈頌に対しては、内容上、差のあるものは全部指摘しておいた。この場合、意味内容が同じであるときには、文法形の差はあっても引用していない。RS 本には校訂者が適当と思うところに Hindī をもって見出しをつけている。本訳においても一応それを踏襲している。訳文中、〔 〕は Sanskrit Commentary よりの補訳（従ってこれは、PB, MS 本に見出される偈頌にかかる）、（ ）は訳者の補った部分であることを示す。

附記　紙数の関係上、本稿には No. 54 までを掲載した。

(33) Hindī chāyā の読解にあたってはカルカッタ大学の Satya Ranjan Banerjee 博士ならびに Ramesh Mathur 氏に御教示をうけた点が多い。又、Avahaṭṭha 原文の解読については同大学の S. Sen 博士に多大の御指導をいただいた。附記して謝意を表します。

DKS 對 照 表

1. RS 本の番号は上述の如く verse number を示さぬ故、同一番号の下に収められる二行が二頌と読むべき場合には、後の頌を'をもって示した。
 2. () は PB, MS 本において原文が未発見でありチベット訳 (Tib.) のみあることを示す。
 3. “その他”とは他の文献に全文あるいは一部が引用されていることを示す。
 4. * 印は全文がなく一部が欠損していることを示す。
 5. ° 印は“全同”でなく“類似”していることを示す。

PB	MS	RS	その他	PB	MS	RS	その他	PB	MS	RS	その他	PB	MS	RS	その他
1	1	1		25	27	49	CK p. 24	51	53	56		79	81	121	
2	2	2		26	28	50		52	54	104		80	82	121'	
3	3	3		27	29	51	HT II, 5, 68	53	55	61		81	83		
4	4	4		28	30	52		54	56	62		82	84		
5	5	5		29	31	29	CK p. 101	55	57	63		83	85		
6	6	6		30	32*	30		56	58	44	SS p. 10	84	86		
7	7	7		31	33			57	59	64		85	87		
8	8	8		32	34	89		58	60	65		86	88		
9	9	9		33				59	61	66		87	89		
10	10	10		34	35	90		60	62	67		88	90	25	
11	(11)	11		35	36	33		61	63	68		89	91		
(12)	(12)			36	37	34		62	64	69		90	92		
13	13	11'		37	38	27		63	65	70		91	93		
14	(14)	12		38	39	28		64	66	71		92	94		
15	(15)	13		39	40	91		65	67	72	SS p. 36	93	95		
16	17	SDS IV SS p. 32		41	41	36		66	68			94	96		
17	17'	SS p. 32		40	42	24		67	69			95	97		
16	18*	14		41	43	23	SS p. 36	68	70	75		96	98	CK p. 14 SS p. 36	
17	19	15	SS p. 10	42	44	92		69	71			97	99		
18	20	16		43	45	26		70	72			98	100		
19	21	18		44	46	93		71	73			99	101		
20	22	19	DKT 2, a-b	45	47	94'		72	74	76		100	102		
21	23	20		46	48	95		73	75			101	103	SS p. 36-7	
22	24	42		47	49	96		74	76	78		102	104		
23	25	43	CK p. 114	48	50	97		75	77			103	105		
24	26	48		49	51	98		76	78			104	106		
				50	52	99		77	79	°156		105	107		
								78	80	128					

PB	MS	RS	その他	PB	MS	RS	その他	PB	MS	RS	その他	PB	MS	RS	その他
106	108		DKT 13	112	(114)					77	CK p.62. Saraha の断片 II. 9 (PB p. 7) Kriyā- sam- graha-				nāma- pañji- kā (cf OR C. p. 80)
107	109		DKT 12			31	PB 本, DKT の断片								114 DKT. 9
108	(110)					35	SS pp. 36, 79								
109	(111)					58	CK p. 35								
110	(112)														
111	(113)														

I 六 ⁽³⁴⁾ 派

〔1〕 バラモン

- 1 バラモンたちは、秘義 (bheu, Skt. bheda(ka)m) ⁽³⁵⁾ を知らずに四ヴェーダを読む。
- 2 土、水、クシヤ草をとて〔彼等はヴェーダを〕読む。また、家に座して火をもやす。供物を投げいれるために火をもやすことは無益であり、けむい煙が眼をやくばかりである。
- 3 一本あるいは三本の杖を持って聖仙をよそおい、ハンサの教えによって

(34) Comm. atra tāvad ṣad darśanāni ucyante. brahma-īsvara-arhanta-bauddha-lokāyata-samkhyāś ca. しかし PB, MS, RS 三本及びチベット訳を通じて最後の二派に言及するところがない。

(35) Comm., jāti-bhedajānadbhir とあるも、bheda はサハジヤ乗でいう神秘的真理を指するものと思われる。cp' PB 104: ḷau ghare ḷau vaṇem vohi thiu ehu pariā-ṇahu bheu. また RS 74; 112'; 165 (infra). Also cp. MS, "mystère"; ORC p. 84; Hindī "mystery."

(36) ekadaṇḍī tridaṇḍī 古来、Hindu の遊行者 (sannyāsin) は三本を一つにしばった杖を携えており、tridaṇḍin と呼ばれていたことが知られている。e. g. Manu Smṛti XII, 10; Yājñavalkya Smṛti III, 58 しかし後代にシュリー・ヴィシュヌ派の Rāmānuja 系統に属する遊行者は常に三本の杖を持ち、シヴァ派教団の設立者たる Śaṅkara 系統のものは一本の杖を用い、両者もそれぞれ tridaṇḍin, ekadaṇḍin と呼ばれていた。cp. J. N. Farquhar, An Outline of the Religious Literature in India, Oxford, 1920, pp. 174; 243; 井原徹山, 印度教, 大東出版社, 昭和18年, 315 頁; L. Renou, L' Hinduism, Que sais-je, No. 475—邦訳, 渡辺照宏, 美田稔, インド教, 白水社, 1960, 91 頁 (ただし Renou は“一つの節 (noeud) のある杖”, “三つの節のある杖”と解する)。本頌の場合、もし著者 Saraha が後者の用法を意識していたとすれば、Rāmānuja の年代 (1016-1091 AD) からして、Saraha も 11 c 以降の人と云わざるをえない。

〔自らを〕 賢者と考える。〔彼等の〕 誤謬により世界は虚偽に束縛されている。
〔彼等は〕 法も非法も（実は） 同じであることを知らぬ。

[2] パーシュパタ

- 4 [この派の] 師匠たち (airia-, Skt. ārya-) は灰を〔身体に〕 塗り⁽³⁸⁾、頭には
髻という荷物をのせる。家に座しては灯をともし、一隅に座しては鈴を振る。
- 5 眼を閉じ、趺座を組み、〔人々の〕 耳に〔これが正しい道だ〕と囁くと、
⁽³⁹⁾ 人々はだまされてしまう。彼等は後家やら、一月間の断食の誓をたてている
⁽⁴⁰⁾ 女やら、その他の人を謝礼金めあてに入信させる。

[3] ジャイナ

- 6 爪を長く伸ばし、汚れた衣服をまとい、あるいは裸で髪の毛 (kesa-; Skt. keśa-) をひきむしりながら、ジャイナ僧 (khabaṇa-, Skt. kṣapaṇa-) は、かく外觀からして〔真実の〕 乗物⁽⁴¹⁾ (道) (jāṇa, Skt. yāna-) をあざ笑う。かくして〔自分勝手な〕 解脱の教で自らを束縛する。
- 7 もし裸に解脱があるのなら、犬や野狐にも（解脱はある）。身体の毛 (loma-, Skt. loman-) をひきむしって成就 (siddhi) があるのなら、若い女の腰 (niamba, Skt. nitamba-) にも（成就があるにちがいない）。
- 8 尾羽 (picchī, Skt. piccha-) を手にすることにより解脱がみられる、というのなら、孔雀やヤクにも解脱はある。拾い集めた穀物を食として (uñche bhoañerī, Skt. uñchena bhojanena) 智慧が得られるなら、象や馬も智慧を得るであろう。
- 9 サラハは云う。ジャイナ僧 (khabaṇa-) に解脱があると私には思われぬ。
身体（からして）真理をはなれでいるので、他世界が成就することは全くな

(37) haṁsa uesem=PB, cp. MS haṁsaü besē; Comm. paramahamṣa-veśam ここで (parama-) haṁsa とは Viṣṇu のことと思われる。

(38) 西城記 11. 20 にいうところの塗灰外道である。Pāśupata における灰の愛用については、see 原実、Pāśupata 研究 (1), 印仏研 XII, No. 1, 1964, pp. 408, 411

(39) raṇḍī. Comm, svāmirahitā. cp. Hindī “a widow.”

(40) muṇḍī, Comm, māsikopavāisikī. cp. Tagare, Ap. Gr., p. 317; Hindī, “a woman with shaved head, widow.”

(41) jāṇa. Comm, mārga. 尚 MS は jāna (Skt. yāna) (MS 本 vss. 6; 37) と jāṇa (Skt. jñāna) (op. cit. vss 8; 23) を区別するも、PB, RS はしからず。

(42) camara この動物の尾は特にジャイナ教徒により、虫を追い払う払子として用いられた。

⁽⁴³⁾
い。

[4] 仏教

10 長老の教に従う新入の僧や比丘たちは（単に）出家者の服装（だけ）で尊敬されている。あるものは座して経典を説明し、あるものは思索に耽っているのがみられる。

11 他のものは大乗に走り、[また他のものは] マンダラ輪を冥想⁽⁴⁴⁾ (?) する。また他のものは空⁽⁴⁵⁾ (gaāṇa-, Skt. gagana-) に執着する。この [サハジャの] 完全な智慧⁽⁴⁶⁾ (parīāṇa-, Skt. parijñāna-) 以外には何もないのだ。

11, （上述諸派の如く）サハジャを捨てて涅槃に走っても、最高の真理は一つだに得られぬ。

12 何人であれ、如何なるものに対してであれ、また如何なる方法によってで

(43) pāda c-d : tatta-rahia kāā na tāva para kevala sāhai=PB, MS (na tāba for na tāva) MS は tāba を tāpa と解し (cp. Tib. dka') „privé de réalité le corps n'endure que douleurs” と訳すも首肯しがたい。意味内容の上からも無意味であり、sāhai (Skt. sādhayati) も endurer とみるとはむづかしい。tāva は tāvat と解すべく (cp. MS 62 (=PB 60; RS 67); 90 (=PB 88; RS 25); 84 (=PB 82); 85 (=PB 83)) また para (Tib. c' am) は Comm に従って paraloka の意に解すべきであろう (cp. RS. 48 below)

(44) cellu Comm, daśa-śikṣā-padī, cp. Tagare, Ap. Gr., p. 383 (“a disciple”); MS 本 pp. 207, 222 (=śrāmaṇera); Hindī celā, “a disciple.”

(45) cp. PB, MS : kovi cinte kara sosai diṭṭho (思索に耽り心を涸らしているのがみられる)。

(46) maṇḍala-cakra Bagchi は DKS (PB 本) 24; 98; DKK 9; 18 等を比較しつつ、Shahidullah の “le cercle magique et la roue tantrique” (MS 本 p. 94) を批判し、実は “a lower state of the mind in its march towards the state of vacuity (citta の上昇については cp. 註 54, 70)” と解する (PB 本 pp. 178-9). このヶ所は他の仏教 Tantricism 諸派に対する批判である。尚 Maṇḍalacakra につき HT Glossary q. v.

(47) pāda b : maṇḍala cakka mavi nādheu. nādheu は不可解。Hindī chāyā は bhāvai (Skt. bhāvayati)

(48) gagana は śūnyatā と同義に用いられる。cp. ORC, p. 101; RS 115 below. 尚、同じく空 (sky) を意味する ākāśa が古く Saddharma-puṇḍarīkasūtra 124. 11 に śūnyatā と殆ど同義に用いられている。cp. Edgerton, BHS Dict. しかし ākāśa が śūnyatā の意に用いられる例はサハジャ乘文献には見当らぬようである。

(49) PB の pāda b-d の読み方は異なる。taḥīm sutanta takkasattha hoi, koi maṇḍalacakra bhāvai aṇṇa cauṭṭha tatta dīsai” そこ (大乗) には経典があり論書がある。あるものはマンダラ輪を冥想し、また他のものは四諦をみつめる”。

あれ、満足を得たといつても、冥想 (jhāṇa-, Skt. dhyāna-) を行って何で解脱が得られよう。（同様に）灯火が何になろう。供物が何の役に立とう。マントラを修習したとて何が出来よう。⁽⁵⁰⁾

13 霊場、苦行林に赴いて何の甲斐があろう。沐浴して解脱が得られるとでもいうのか。

14 ああ、偽りの束縛を捨てよ。汝が迷わされているものをふり捨てよ。かの〔サハジャの〕完全な智慧以外には何もないのだ。他の歌 (=他の文献?)⁽⁵¹⁾ に（書かれている）すべては、正にそれ〔サハジャ〕なのだ。⁽⁵²⁾

15 読誦され唱えられるものはそれ〔サハジャ〕であり、シャーストラ、プラーナに説明されるものもそれである。この〔サハジャ〕を目指さぬ〔解脱に関する〕見解はない。しかし、それは、ただ、すぐれた師の足〔下に奉仕して始めて〕みられる。⁽⁵³⁾

16 師の言葉が〔弟子の〕心 (hia-, Skt. hr̥daya-) にはいるなら、それは〔サハジャそのものを得ることで〕あたかも掌中にしっかりとおさまったものにみえる。サラハは云う。世界は虚偽におおわれている。愚か者は自らの本性（がサハジャであること）を知らぬ。

II 慈悲を伴う修習

17 慈悲 (karuṇā) なくして空 (suñña-, Skt. śūnya(tā-)) に執着するものは最高の道に入ることはなく、また、慈悲のみが成就しても、人は来世においても、解脱をうることはない。

17' しかし、この（慈悲と空の）両者が合するなら、その時には存在 (bhava)⁽⁵⁴⁾ も涅槃 (nibbāṇa) もなくなる。

(50) kintaha kijjai mantaha bhāvem. PB reads sevvam for bhāvem

(51) dhandhā cp MS p. 233; Tagare, Ap. Gr., p. 410; BHS Dict., dhandha.

(52) pāda c-d : tasu pariāṇahu aṇṇa nṇa kovi, avare gāṇṇe sabbai sovi. PB は殆ど同じだが MS は MSS. の abare aṇe sajjai soi に基づき、Tib. 訳を参照して abace-aṇe sabboi soi (Dans le réveil de la conscience, tout est le soi)

(53) これらの文献に示されているのは結局はサハジャに外ならぬことをいう。尚 cp. RS 121.

(54) karuṇā と śūnyatā は仏教タントリズムの二大原理である。この両者はそれぞれ upāya と prajñā とも呼ばれ、さらに男性および女性原理ともされる。人間の身体は宇宙の縮図であり、そこには三本の主要な神経 (nāḍa) がある。左右の二本は二

- 18 冥想も行なわず、出家もせず、家に妻と共に住み、はげしく〔五欲の〕対象をたのしみつつ、(しかも)解脱がないのなら、⁽⁵⁵⁾サラハは云う。(そんな)“完全な智慧”は私にはうれしくない。
- 19 もし〔サハジャが〕眼に見えるものなら、冥想により何をしようというのか。またそれが(見えぬものなら、その)暗黒の中で冥想が役に立つであろうか。⁽⁵⁶⁾(されば)サラハは叫ぶ。“サハジャの本性は存在でも非存在でもない”。
- 20 それによって人が生れるもの(=サハジャ)によって人は死に、それによって最高の大樂(parama-mahāsuha-, Skt. sukha-)も成就される。サラハは云う。“私に(自分の意志で)何が出来よう。(しかるに)獸のごとき世間の人は、私が何をしているかを理解しない。”⁽⁵⁸⁾
- 21 あるものはすぐれた財宝を蓄積し、他のものは百人に散じ与える。(しか

元的対立概念を代表すると考えられていて, karuṇā, upāya は右の, śūnyatā, prajñā は左の神経に比定される。この両者が中央の神経の下方, ヘンの辺にある Nir-māṇacakra (=ヒンドゥー・タントリズムの Mūlādhāra-cakra) にて合すると, そこに“粗雑な菩提心”(saṃvṛti-bodhicitta) が生ずる。かくして生じた菩提心は中央の神経(Avadhūtikā)を通って上昇し, 他の cakra (see 註 70) を経て頂上の Uṣṇīṣa-cakra に至る。かくして粗雑なる菩提心は“完全なる菩提心”(vivṛta)となり大樂(Mahāsukha)の状態となって解脱する。ここには一切の対立概念はなく, 存在(bhava)とか涅槃(nirvāṇa)といった区別もないとされる。故に菩提心とは, 単に“菩提を求める心”ではなく, “The extremely blissful state of mind produced through the sexo-yogic practice”(ORC p. 28)と定義される。

- (55) 感覚的享受をうけつつ, しかもそれに溺れることなく解脱を求めるについて, cp. DKT 24: “毒薬〔に通じている人は, 毒薬〕を飲んでも, 毒薬に害されぬ如く, [Yogin は] 存在にとらわれることなく, 存在〔即ち感覚的悦楽〕をたのしむ。” RS 48; 71; 92; 100; 144 (below), HT II, ii etc.
- (56) pāda d: Saraha bhaṇai pariāṇa ki ruccaa PB reads muccai (Skt. mucyate) and MS uccai (Skt. ucyate, cp. Tib smra) for ruccaa.
- (57) pāda a-b: jai paccakkha ki jhāṇe kīai, ahavā jhāṇa andhāra sādhiaa PB:... jai parokkha andhāra ma dhīaa; MS:aha parokkha andhāra mābiai (“on mesure...”)
- (58) jā llai uvajjai tā llai bājjai tā lai paramamahāsuha sijjhai PB, MS: jallai marai uvajjhai (MS uba°) vajjhai (MS ba°) tallai parama mahāsuha sijjhai (“それにより人が生れ, 死に, 縛られるものにより～”)
- (59) pāda c-d: Saraha bhaṇai mahu ki kkarami pasū loa ṇa bujjhai kī karami PB, MS: Sarahem gahaṇa guhira bhāsa kahia pasu-loa nivvoha (MS-bb-) jima rahia, “S. は奥深く深遠な言葉を語る。獸の世界は(それを)理解せずにいる”。

も) この両者は時と共に死んで行く。(真理を) 私は語ろうと思っても語ることは出来ぬ。⁽⁶⁰⁾

22 pāṇi calaṇi raa gai jīva dare ⁽⁶¹⁾ na saggū. この二つの道が私により説かれた。汝の望むところに従え。

III 心 (citta)⁽⁶²⁾

23 ただ(粗雑な菩提)心(citta)のみが一切の種子, 存在(bhava-)も涅槃(nivvāṇa-)もそれより派生する。それは如意珠であり, 尊重すべきである。〔それは世の利益をはかる人の〕望みの果実を与えてくれる。⁽⁶³⁾

24 人はカルマに束縛されている。このカルマの解脱により意(mama-, Skt. manas-)の解脱がある。意の解脱の結果, 最高の涅槃を得る。⁽⁶⁴⁾

25 全世界は文字(akkhara-, Skt. akṣara-)に束縛されている。文字を知らぬ者(nirakkhara)はない。しかし文字を超越した状態(nirakkhara)を得

(60) サハジャあるいは最高の真理は智識として教え得るものではなく, 自ら体得する以外に方法のないことは隨處に強調される。

(61) pāde a-b は難解である。特に dare とは何か。Hindi chāyā も同じく dare。また pāda c-d も内容的に唐突で, 伝承上の混乱が予想される。

(62) citta 及び manas はサハジャ乗の重要な概念であるが, その意味内容は未だ充分に明らかでないようである。先学はこの両語を同義語とみなし, mind, l'esprit と訳す。ただ Snellgrove のみが, それぞれ, thought, mind と使い分けるが, 両語の意味内容は複雑であり, かつ, 用法上の混乱もある。この点については別に発表するが(“Three Dohās in the Dohākośa of Saraha—with Special Reference to the Meanings of Citta and Manas—, 1966 年春出版の Gurupūjāñjali for Dr. S. Sen に発表の予定) citta には(1)思考(thought), (2)saṃvṛti bodhicitta, (3)vivṛti bodhicitta の三義を区別すべきであり——但し DKS, DKK, DKT を通じて bodhicitta なる語は用いられず, まして, saṃvṛti, vivṛti なる語も見当らない。しかし, 註釈及び実際の用例の比較研究よりみても, 例えは HT に説かれるこの教義は dohā 作者たちは充分に意識していたことは疑いがない—— manas は①意(mind; 知的機能)②citta と混同され, saṃvṛti 及び vivṛti bodhicitta の意味に用いられる。

(63) 現象世界は vikalpa の働きによって(saṃvṛti-bodhi-) citta により作り出されたものである。cp. ORC pp. 36ff.

(64) こここの manas とは vikalpa をになう知的機能のことと思われる。

cp. Comm; tat-(sic. karman) parityāgādhimokṣeṇa ca bhavati manomokṣam. mokṣañcātmātmīyavikalparahitatatayā mithyābhāvanayā manah sañjñaiwa bha-nḍhanāt tasya nirodhah.

た時、文字は亡びる。⁽⁶⁵⁾

- 26 [我見に関する vikapa に] 束縛されている者は十方に走りまわり [六道の輪廻にさまよう]。この [束縛から] 解放される時、人は動搖なく安住する。あたかも、友よ、[荷物をのせると走りまわり、しかもその重さに堪え得ず、荷物をはずすと立ちどまる] ラクダを見よ。[かくの如き] 矛盾があるように私には思える。⁽⁶⁶⁾
- 27 思考 (citta) の根本を人は知らぬ。サハジャの境において、“三”は真実である。⁽⁶⁷⁾ (人は) どこに生じ、死に赴き、どこに住むというのか。これについては明らかである。⁽⁶⁸⁾ (すなわち、サハジャにおいて以外にはない。)
- 28 [かく] 根本をはなれて真理を考える (cintai-, Skt. cintayati) 者には、師の教えがすべてを明らかにしてくれる。サラハは云う。“この真理を明らかに知れ。最高の大樂をかくのごとく (= 師の教に従うことにより) 尊重せよ。”⁽⁶⁹⁾

[1] 最高処 (=悟り)

- 29 感覚器官の働きが消滅し、自己の本性が亡びた時、(そこに)，友よ，“サ

(65) 文字 (akṣara) は vikalpa により構成される単なる概念、知識を意味する。従って nirakṣara とは、かかる対立概念の亡びた悟境のことである。なお cp RS 37 below.

(66) 本頌は No. 93 と同一である。

(67) 本頌は重要な部分で PB, MS と異なり、むしろ Tib. に近い。RS 本は pāda b を sahajem tiṇṇavi tattha と読み、Hindi chāyā も sahaje tinau tathya (S.において三は真実なり) とする。しかし MS : sahajē tinna bitattha; PB : sahajem tiṇṇa vi tattha (S.において三は偽りである)。cp. Comm : evam tattva trayam lakṣya-lakṣṇa-lakṣakam vitatham atathyam. しかし Tib は tinnavi tattha に読む。しかし、サハジャの境においては一切の認識作用は止滅するのであり、もしこの“三”が Comm の如く“知らるべきもの、知ること、知る者”の三を意味するものとすれば、RS 本は MS の如く sahajem tiṇṇa vitattha と読むべきであろう。

(68) pāda c-d も RS は Tib に近い。RS : kahim uajja vilaa jāa kahim vasaa phuḍa etthu; Tib ; gañ-la de skyes gañ-du nub gañ-du gnas 'gyur gsal-bar mi śes-so (どこに生れ、どこに沈み、どこに住するかを明らかに知らぬ) しかし PB, MS は kahim のかわりに tahim とする。MS : tahī jivai bilaa basiau tahī heutta (ああ息子よ、そこ (sic. サハジャ) に生き、亡び、住め); PB : tahi phuḍa etthu (そこに生き、住め。これについては明らかである)。しかし Comm には he putra とある。

(69) pāda c-d : ḡiuṇattaṇem jāṇahu evvahim parama mahāsuha māṇahu. But PB, MS read differently: “愚か者よ。明らかに知れ、現象世界の差別相は citta の外的形態である。”

- ハジャの歓喜（に包まれる）身”⁽⁷⁰⁾ (sahajānanda-taṇu) が現成する。これについて師に明らかに問え。
- 30 意 (maṇa-) が動かぬところに、生氣 (pavana) も停止する。⁽⁷¹⁾ そこに最高の大樂がある。かくサラハは云うのだ。
- 31 望むがままに意 (maṇa-) を行かしめよ。さもなければ、動くことなくとどめよ。⁽⁷²⁾ (中途半端に) 眼を半分あけていて、何で眼の休息があろう。
- 32 もし人が方便 (uāa-, Skt. upāya-) より方便へと走るならば、その時は慈悲 (karnṇā-) のみが成就する。もし (方便と空の) 両者が合することが出

(70) 前註 54 にみた如く、中央の神經に生起した bodhicitta は上昇し、高次の bodhicitta になってゆく過程に四の cakra を通過し、それに応じて四の kṣaṇa (瞬間) と四の ānanda (歓喜) がある。四の歓喜とは Ānanda, Paramānanda, Viramānanda 及び Sahajānanda である。本頌における Sahajānanda taṇu とは最高の歓喜、即ち最高の悟りに到達した時の“身”，Mahāsukha-Kāya を意味する。cp. S. B, Dasgupta, ORC pp. 98 ff; —do—, Introduction to Tāntric Buddhism. Calcutta, 1958, pp. 152 ff. これは即ちサハジャ乗に云う究極的解脱の境地であり、これが大樂である (cp. 次頌)。ここでは感覚の働きは消滅し、主客の対立概念もない。cp. CK 30: jāsu sunante, tuṭṭai indiāla, nihuṇe ḡia maṇa dea uāla.

(71) 体内に生じた bodhicitta の上昇の動力因は、prāṇa, apāṇa という二つの、それぞれ上昇、下降を司どる生氣 (pavana) である。生氣は左右二本の神經を通って動き、それと共に知的機能をもつ manas の働きが生じ、二元的対立概念を作る。従ってサハジャ乗の修習法として、左右二神經における動きを止め、中央の Avadhūtikā に流入させる。この左右二神經とは前註 54 にのべた如く、二元的原理を代表するもので、その動きを止め、中道を行くべきことは、Caryāgīti, Dohākośa において種々の譬喻をもって説かれる。e. g. CK 1; 4; 5; 7; 9; 11; 14~15; 17; 32 etc. またこの manas の動きはネズミ、鹿、馬等の動きにたとえられ、サハジャ乗作家の好んでとりあつかうテーマである。

(72) pāda a-b : jahi maṇa marai pavaṇaho tahi khaa jāi. しかし PB, MS には tahi (Skt. tatra) がなく、“意が動かず、生気が停止するところに大樂がある”と読む。

(73) 本頌は PB, MS に見出されぬが、PB 本中の DKT の最後の dohā (not numbered) に類似する。RS : jahim icchai tahi jāu maṇa ahavā ḡiccalā tṭhāi, addhu-ghāṭī loaṇem, diṭṭhīvisāme koi. PB DKT : jahi icchai tahi jāu maṇa etthu ḡa kijjai bhanti addha ughāḍthi āloaṇem jhāṇem hoi re thitti. “心を望むところに行かしめよ。これに関して誤ってはならぬ。[Tillopāda は意の行くべき道について云う]。[Nirmāṇacakra の] 下方にある [Avadhūtikā] の道を破り、[智識の猛火] の光により、異想により [大樂の] 確立がある。”これに比して RS 本の読み方は明確を欠く、cp. Hindi chāyā : ardha-udghāṭita locane.

来る時⁽⁷⁴⁾、存在(bhava-)と涅槃(nivvāna-)から解脱する。

33 空(āasa-, Skt. ākāśa)は始めはすんでいるが、じっと見つめつづけてい
るうちに視野はくもってくる。このように努力(āasa-, Skt. āyāsa-)は不完
全な(vikāla-, Skt. vikala-)ものである。このことを、自らの知的機能
(maṇa-)の罪により、愚か者は知らぬ。

34 [誤った知識による] 自惚れの罪により、[愚か者は] 真理を知らぬ。(か
くして) 彼は悪魔(の如く)すべての乗物(・道)(jāṇa, Skt. yāna)を損
する。全世界は冥想により誤らされている。(そして) 自らの本性を[サハジ
ャであると]誰も知らぬ。

35 月と太陽をつぶし、投げ、飲み干す(時)⁽⁷⁵⁾、人は最高(の処)に入る。かく
して、(そこでは)すべての智識(jāṇa, Skt. jñāna)は価値を失う。

36 自らの意(maṇa-)が真理に清められた時、師の教は心に(hiahi, Skt.
hṛdaye)に入る。かく考えてサラハによりうたわれるので。“私はマントラ
もタントラも一つだに求めぬ”。

37 そ(のサハジャ)はいかなる属性(guṇa)もなく、(表現すべき)文字も

(74) upāyaと呼ばれ、また karuṇāとも呼ばれるのは右の神経のことをいう。see 註
(54)。従って“両者が合する時”(jai puṇa veṇṇivi joḍaṇa sakkaa)とは“方便及
び空が共に働く時、(慈悲と智慧が円成する)”の意と思われ、方便と慈悲が合す
るというのは無意味である。もし原文の Reading が正しいとすれば、意味上の省略
が甚だしそぎる文といえよう。

(75) 本来清浄なるサハジャは、他派で行うような種々の修行に力をそそぐと、かえって
くもらされることを意味するものであろう。

(76) cp 前註(41) Comm. yānamārgam; Tib, theg-pa

(77) 左右二本の神経は種々に呼ばれるが(see ORC p. 92), 中でも重要なのは prajñā
と upāya, lalanāと rasanā, Gangāと Yamunā, āliと kāli, そして śaśinと ravi
(月と太陽)である。月と太陽を亡ぼすとは二本の神経の動きを止めることであり
(cp. 註 71), DK, caryāgītiに好んで用いられる譬喻。

(78) pāda a-b: canda-sujja ghasi ghālai ghot̄ai. 本頌は PB, MS にないが, Subhā-
śitasamgraha p. 36 にこの部分だけが引用されている(gholia for ghālia)。ghasi
につき cp. H. T. Sheṭha, Pāia-Sadda-Mahāṇavō, Calcutta, 1928, 以下 Sheṭha
ghasa < Skt. √ghṛṣ. ghālai につき cp. Māgadhī ghālñē; Gujarāthī ghālvū, Ap.
root √ghalla=Skt. √kṣip. see Tagare, Ap. Gr. p. 379. ghot̄ai につき Tagare,
op. cit. p. 380 √ghaṭa, “to drink”.

(79) ḥiamaṇa sāccem sohia jabberm. PB, MS read savvem (Skt. sarveṇa, “完全に”,
cp. Tib. thams-cad) for sāccem

ない (nirakkhara-, Skt. nirakṣara-)。尊い師の足下に (奉仕して) のみ我等に文字が与えられる。⁽⁸⁰⁾ それを望んでも私は見ることは出来ず、その個有の性質を求めて何で (見ることが出来よう)。

38 (されば) それ (サハジャ) は一切の真理の精髓といわれる。サラハは云う。それは私にとって (感覚的に) うれしいと感ずるものではない。

[2] サハジャ・大楽

38' もし、日夜サハジャに入いるなら、そこでは (万物の) 来ては去る (流転) から逃れる。⁽⁸¹⁾

39 (サハジャについて) 存在するとか非存在であるとかの差別は無用である。⁽⁸²⁾ その中間の場所に入れ。(粗雑な菩提) 心 (citta) は種々 (の現象として) の形をとって現れる。しかしその心自体は何ものかによって現わしめられたものではない (?)。

40 感覚器官の対境にたよることなく、(サハジャを) 自らに体得するとき、⁽⁸⁴⁾ 自らの (粗雑な菩提) 心 (citta) の障害は亡び、そこに大楽があると知れ (?)

41 紙は拵げられ、インキな用意された。(一たん) 書かれたものは滅することがない。最高処に入いったことが知られる時、それ (悟り) はどこに亡び行くというのか。

42 [サハジャが] 冥想を超えたものなら、冥想をして何になろう。また、語

(80) sirigurupāe ndiṇṇu mo vākkhara 文字が与えられるといつても、文章や口頭による表現が可能という意味ではなく、師の足下に奉仕することにより、サハジャが体得されることを云うものと思われる。尚、cp. RS 65

(81) amanagamaṇa, Skt. āgamana-gamana 万物の本性はサハジャであり、可観的存は妄想の所産に過ぎない。現象世界に不变なものはなく、万物は来ては去って行く。しかしサハジャを体得した時、その流転は消滅する。cp. CK 42：“我が (bodhi-) citta は空において完全である。五蘊の消失を悲しむな。Kānha が (死んで) もういないとはどういうわけか。云え。彼は (サハジャの形で) 常に三界にあふれ脈っている”。；Comm. to CK 46, 2: saṁsāre yātāyātam; DKS (RS) 75; 136; CK 7, 3; 21, 2; 42. 4; ORC p. 36.

(82) pāda a-b : bhāvābhāva veṇṇi ṇa kājja cp. DKT 2: sahajem bhāvābhāva ṇa pucchahu, “S について存在、非存在を問うな。”

(83) pāda c-d : viviha paārem cittavi apiva sovi citta ṇa keṇavi apiva. apiva が難解である。Hindi chāyā は arpiya (for Skt. arpita, “offered, placed on”) とする。

(84) pāda d は明確ではない。jhāṇa mahāsuha tatta. Hindi chāyā は dhyāna mahā-sukha tatra とするも dhyāna は √dhyai の一般的の意味 “to think of, imagin” の意にとっても無理であろう。To be read jāṇa (for jāṇīhi) ?

り得ぬもの (avācca-, Skt. avācya-) なら、説明が何の役に立とう。全世界
 の人) は存在 (bhava) という外的表現 (muddā-, Skt. mudrā-) にあざむ
 かれ、何人も自らの本性を (サハジャであると) 知らぬ。

43 マントラもタントラも、冥想の対象も、意識統一も、愚か者よ、すべて誤謬の原因なのだ。本来清浄である (完全な菩提) 心を冥想によって汚すな。
 すでに安樂 (suha-, Skt. sukha-) に住している自分を (殊更に) 悩ますな。

44 走りまわってばかりいて、師の言葉という甘露味を飲まぬものは、聖典の
 隆大な内容の砂漠で渴死するであろう。

45 (菩提) 心 (maṇa) ⁽⁸⁸⁾ が汚れないサハジャの境に赴いた時、(もはや) 敵の家
 に入ることはない。そこに (菩提) 心 (cīc, Skt. citta-) は安住し、かくして彼とジナとの差はなくなる。

46 丁度、塩が水に溶けるように、(菩提) 心 (citta) ⁽⁹⁰⁾ が (サハジャの中に) 安住する時、自己は他者と同じものとみられる。ここにおいて、三昧 (samāhi-, Skt. samādhi-) など何の役に立とう。

47 “プラフマー (神) でさえ、若い女の考え方 (citta-) を知らぬ。誰か他のものが知り得よう” (と人は) 私に問う。(しかし) 認識したとか認識しない (?) とかいうのは名前だけの (=言葉上の) 区別であり、最高の真理は一のみである。

48 大いに食べ、飲み、女友達と交わりをたのしみ、輪をみたす。かくして他

(85) cp. MS: “(Tout le monde est trompé par) la monnaie qu'est l'existence”; Snallgrove: “appearance”; Tib phyag-rgyas

(86) 本頌は CK 34, 2 に対する Comm. に引用される。

(87) dhavahim PB: °hi しかし MS: habahī (=Skt śīghra-)

(88) pāda a: maṇa nimmala sahajāvatthe gau manas は属々 (bodhi-) citta の意に用いられる。cp. 前註 (62)

(89) pāda b: ariula (Skt. arikula-) nāhi mpavesa arikula が何を指すかは明確でない。しかし CK. 16 には菩提心が上昇して Uṣṇīṣakamala に至り、涅槃に達して大樂のジュースを飲む時、“敵” (vipakṣa) はもはや見出されぬことを云う。そして Comm. は kleśa と釈する。本頌の arikula も煩惱の意であろうか？

(90) cp. DKK 32: “塩が水に溶けるように、(菩提) 心が女主人 (ghariṇī) と融合する時、その瞬間に samarasa (non-duality, cp. ORC pp. 31-2; DKT 2; 10~11; RS 57; 78 etc.) の状態に入る”。塩が水に溶ける譬喻につき, see PB 本 p. 177.

(91) pāda c: ḥāmehim saṇṇa asaṇṇa paārā. Hindī chāyā は satta asatta (善惡) とするも, saṇṇa, asaṇṇa は sañjñā, asañjñā とみるべきであろう。

世界 (paraloa-, Skt. °loka-) は成就されるのだ。(それを知らぬ) この有情
世界 (に住む人) の頭を足蹴りにせよ。⁽⁹³⁾

[3] 最高処 (=悟り)⁽⁹⁴⁾

49 意 (maṇa-) と生気が流れず, 太陽と月とが出入せぬところ, そこに, 愚
か者よ, (菩提) 心 (citta-) を休止せしめよ。これがサラハの教えである。⁽⁹⁵⁾

50 (万物) を一とせよ。二とするな。(すなわち) 二元的差別をつけるな。三
界はすべてのこりなく, 一色に色づけられている。⁽⁹⁶⁾

51 そこ (最高の境) には始めも終りもなく, 中間もない。存在もなく涅槃も
ない。⁽⁹⁷⁾ それは最高の大樂であり, 自も他もない。

52 十方において, 前にも後ろにも, 私の見るすべてはそれ (サハジャ) なの
だ。かくして汝の謬見は今や亡びた (?). (この上) どの主 (nāha-, Skt.
nātha-) にも聞くことはない。⁽⁹⁸⁾

(92) pāda a-b : khāantem pivantem suraa ramante āliula bahulaho (so read for
bahulaho, misprint) cakka pharante. cakka とは yoginī-cakra のこと。cp. 前註
(46)。PB, MS (pāda b) : niṭṭa puṇu puṇu cakka vi bharante (MS °tē)

(93) pāba c-d : evahi siddhi jāi paraloaha māthe pāa dei bhualoaha. paraloa- と
は悟りの世界のこと。cp. MS 26: aisa dhammā sijhai paraloaha nāha-pāe
dalia bhaa-loaha, “この世間 (に住む人) はその師匠たちに足蹴りされている”。

(94) paramapada とあるも, 同じ見出しが No. 29 の前にもあり, editor の真意がう
たがわれる。

(95) cp. 前註 (71), 尚, 本頌は CK 7, 1 に対する Comm. に引用される。

(96) pāda c-d : ekkem rāmge rañjīā tihuāna saalāsesa “一色” とはサハジャのこと。
PB, MS の読み方は幾分異なる。ehu tihuāna saala mahārāem (MS °rāē) ekku
karu vanṇa. “全世界を大なる rāga (passion) により一色となせ”。Snellgrove は
Cittaviśuddhi-prakaraṇa 及び HT II, 2, 50-51 を参照しつつ, “ritual of union”
を意味するという。尚, 本頌にみられる思想について, cp. “すべての現象的差異は
存在という概念より生じ” (CK 7, 2); “すべては citta の産物であって主観的な幻
にすぎず” (see ORC pp. 36ff); “ただ一なるサハジャの木が三界に輝くのみ” (CK
43, 1)

(97) cp. DKT 6: (samasukha...) āi-rahia ehu anta-rahia etc. 尚, 本頌は HT II, 5,
68 に同じ。

(98) aggem pacchem dasa disem jam jam joami sovi, aivvem tu dīṭhanta dī nāha
na pucchami kovi. pāda c の dīṭhanta dī は Hindī chāyā, dīṭhamtađī を参照し
ても不可解。To be read dīṭhan tuđī for dṛṣṭam trūṭitam? dṛṣṭa が dṛṣti (悪見)
の意に用いられる例については, Edgerton, BHS Dict, q. v. PB, MS read differ-
ently, aggem pacchem dahadihahi jo jo dīsai tatta soi, ajjahi taiso bhanti (Skt.

- 53 誰か味 (sāda-, Skt. svāda-) を外部 (=他人) に与え得よう (=語り得よう)。誰か内部 (の自分) に語るであろうか。(誰か味に味をまぜるものがあろう。⁽⁹⁹⁾ 誰か味を持っていったり, 持ってきたりするものがあろう)。
- 54 自が他の中に合せぬ限り, 万物の流転 (gamanāgamaṇa-) は亡びない。⁽¹⁰⁰⁾ 粮を碎きつつ時をすごしても米は入手出来るものではない。⁽¹⁰¹⁾

bhrānti) mukka evvem mā puccha koi, “……汝の見るすべては真実である。今日こそかくの如き誤謬は解決された。(この上) 何人にも問うな”。

(99) pāda c-d は仮訳である。sāddhaha sāddha ko melavai, ko ānei ko lei. sāddhaha sāddha に対して Hindī chāyā は svādahi svāda とする。しかし pāda a には sāda (Skt. svāda-) とあり, sāddha- を svāda- と読むのは困難である。しかし srāddha- と解するのは意味上不可能であろう。尚, 本頌は言詮を絶するサハジャを体得することを味にたとえたものと思われる。

(100) 註(81)参照。

(101) tusa kuṭṭante kāla gau cāula hattha ṇa lāgga この譬喻の意味するところは, サハジャ乗で重要視するもの以外の修習法は, 所詮は無駄な努力であることを言うものと思われる。cp Skt. idiom, tuṣa-khanḍana, “useless effort”.